アジスロマイシンの組織内動態の検討

久保伸夫　演田聡子　朝子幹也　山下敏夫
関西医科大学 耳鼻咽喉科

アジスロマイシンは，唯一の15員環系マクロライド抗菌薬であり，有効性と安全性から今日日常臨床に頻用されている．しかし，一日１回３日間投与で５－７日間抗菌作用が持続するという用法は特異で，phagocyte deliveryによる他の抗菌薬とは異なる血中および組織内薬物動態の結果とされているが，その根拠となる臨床データは乏しい．今回，アジスロマイシン，クラリスロマイシン，レボフロキサシンを同時投与後の血中濃度および摘出扁桃内濃度をHPLCにて経時的に測定した．アジスロマイシン（250mg）投与では，血中濃度は投与後８時間以内を通じ0.1μg/mg以下で，扁桃内濃度は投与が８時間で血中濃度の100倍に達し，12－24時間でTmax，36－48時間で測定限界に低下した．クラリスロマイシンは，血中濃度のTmaxは４時間，８時間で測定限界以下，扁桃内濃度のTmax２時間，６時間で測定限界以下になった．レボフロキサシンは，血中濃度扁桃内濃度ともにTmaxは２時間，８時間で測定限界以下をしめした．また３日間連続500mg投与の場合，血液中濃度は７日間有効濃度が維持された．